

関西ローマ字

Ver. 3.0.1

twitter.com/awesomenewways

Ver 3.0.0: November 17, 2022

Present: February 2025

関西ローマ字の概要

関西ローマ字は、教育ローマ字をベースとして、関西方言を正確に表記できるようにするためのローマ字体系です。

教育ローマ字と違い、日本語を母語としない人のための日本語教育に利用されることを第一の目標としていないため、ローマ字入力との対応を少しだけ緩めています。

バージョン 1.0 からの主な変更点

- 1モーラ名詞の長母音を表す方法として、母音字を重ねて書かれない母音に当たる部分に下付きドットをつける方法から、書かれない母音に当たる位置にアポストロフィを挿入する方法に変更
- ワ行で発音される h の表記を h から 'h に変更
- 母音の下付きドットを廃止
- エ段長音の後部のイとエ段短音に後続するイの書き分けを教育ローマ字と類似の i i の区別によるものに変更
- 方言記述等のため、表音的な記法で書く場合について明記
- 約物についての規定を削除し、書き手の裁量をより広く認める内容に変更
- 段階的な表記レベルの規定を削除し、約物と同様に書き手の裁量を広く認める内容に変更

バージョン 2.0 からの主な変更点

- 長音記号を母音の下のマクロンから ː に変更

教育ローマ字との関係

教育ローマ字は、おもに日本語教育と現代東京方言の研究に利用するために筆者が2018年から作成している日本語東京方言のローマ字表記法です。

教育ローマ字と関西ローマ字は、共に以下の3要素を目標としています。数字は規則の改訂と運用の際の優先順位です。

1. (ローマ字入力) 現代仮名遣いを正しくローマ字入力するための綴りがわかるようになっていること
2. (発音) 正しい発音がわかるようになっていること
3. (文法) 文法の理解に資すること

このうち、1の「ローマ字入力」については、関西ローマ字と教育ローマ字で異なる基準を採用しています。教育ローマ字は、日本語を母語としない人を対象とした日本語教育を念頭においているため、現代仮名遣いを正しく書くためのわかりやすいガイドとなることが非常に重要です。そのため、教育ローマ字の綴りは長音記号その他の約物に至るまで、USキーボードを基準として、非母語話者にも綴りの見た目から打つべきキーがすぐにわかるようにすることを徹底しています。一方、関西ローマ字はおもに日本語母語話者を対象としており、ローマ字入力の方法はすでに知っていることを読み手に期待しています。そのため、ローマ字綴りとしての美しさに重きを置いた設計になっています。

2の「発音」については、関西ローマ字も教育ローマ字も、現代仮名遣いが分節については高度に表音的であるという性質上、アクセントとイントネーションがおもな課題です。いずれについても独自の理論に基づき、言語の音韻体系をローマ字体系に落とし込みます。両者に共通するのは、筆者が「曲線声調理論」と呼ぶ独自の理論を採用していることです。曲線声調理論は、日本語諸方言について、ピッチ体系をモーラ内部の曲線声調の連続によって記述しようとするもので、東京方言と関西方言の両方について、従来の理論では記述できなかった弁別的なピッチ曲線の特徴を捉えることができることがわかっています。両方言における適用は筆者が発展させましたが、日本語における曲線声調理論の嚆矢は児玉望(2008)「曲線声調と日本語韻律構造」で、筆者の曲線

声調理論もこれに基づいています。次のリンクからダウンロードできます。<https://ci.nii.ac.jp/naid/120003752631>

また、関西方言については、筆者の韻律の理論が東京方言ほど発達していないため、関西ローマ字の一部の表記について、教育ローマ字から類推する必要がある場合があります。その一つが教育ローマ字において「R トーン」と呼んでいるもので、従来「句音調」とも呼ばれているものです。R トーンは、教育ローマ字においても、関西ローマ字においても、任意に大文字と小文字を使い分けることによって示します。そのため、大文字と小文字を使い分ける場合においては、R トーンの分布を正確に把握する必要があります。教育ローマ字においては、R トーンは AP 冒頭2モーラ以内のピッチ形の特徴として容易に観察することができ、また、音声を得られない場合であっても、「\$ 理論」という理論を用いて文の構造と文脈からその分布を予測することができるため、R トーンの分布をローマ字綴りに反映させることは難しくありません。関西ローマ字では、R トーンの分布を正確に把握することが難しいため、一度文を東京方言に翻訳した上で R トーンの分布を観察し、そこからの類推によって原文における R トーンの分布を推測することができます。

3 の「文法」についてもまた、関西方言と東京方言では筆者の理解の程度、また利用できるリソースの質と量に大きな隔たりがあり、関西方言を直接分析して文法理論を立て、それに基づいて表記を確定するという作業が現実的ではありません。そのため、関西ローマ字の表記においては、教育ローマ字における場合と同様の文法理論を仮定し、それに基づいて表記を確定します。

バージョン管理

関西ローマ字は、教育ローマ字と同様、トピックごとの更新を行います。更新は既存の資料を書き換えるか、新たな資料をアップロードし公開することによって行いますが、その場合に古い資料が無効になるわけではなく、原則として古い資料も有効です。

古い資料の内容は、新しい資料と矛盾する部分に限り無効になります。そのため、全ての資料には、互いの優劣関係がわかるようにバージョン番号が付されます。バージョン番号はドットで区切られた3桁からなり、最も右の一桁は、規則の変更を伴わない、文言の修正や加筆などに際して加算されます。最も右の一桁は同一資料の修正履歴を示すのみで、他の資料に対する優劣関係を表しません。左の2桁は、関西ローマ字全体のバージョンを表します。従って、資料の内容は左の二桁を見て数字が大きい順に優先されます。資料を更新する際は、通常は真ん中の桁のみを増加させ、その際に右の桁を0に戻します。ただし、既存の資料を修正する場合、その資料が関西ローマ字の最新の状態を反映していない場合は、真ん中の桁を据え置き、右の一桁のみを増加させることで、意図せず古い内容が再び有効になってしまわないようにします。左の桁は「メジャーバージョン」です。真ん中の桁よりも上の位を表し、そのためこれを加算するときは右の2桁を0に戻すということ以外、実質的には真ん中の桁と変わりませんが、シンボリックな意味を持たせるため、更新内容が特に重要である場合や、その他の理由で筆者がメジャーバージョンを上げたいと思う場合に増加させます。関西ローマ字と教育ローマ字のどちらについても、毎年1回メジャーバージョンをあげることを目安にしています。

バージョン 1.0 は次のリンクからアクセスできます。 <https://quiet-jewel-9b9.notion.site/ver-1-0-ce326512825c40698d52f383e6c024db>

関西方言のアクセント体系

関西ローマ字の前提となる関西方言の韻律体系の理論を示します。筆者による次の記事も参考にしてください。 <https://note.com/j9a/n/ne56511878369>

関西方言は、東京方言と同じくモーラの下降 (F) と非下降 (nF) を弁別する体系です。関西方言の場合、nF に上昇 (R) と非上昇 (nR) の2種類があり、また、素性としてのアクセントは東京方言と違い、モーラの境界ではなくモーラ自体に与えられます。

表: 名詞のアクセント体系

	4 モーラ	3 モーラ	2 モーラ	1 モーラ*
nR1	amerikā	kodomō	mizū	t'ō
nR2	ayabēsi	kimīra	yāma	hā'
nR3	kimītati	īnoti		
nR4	kōsumosu			
R1	ohanasí	suzumé	huné	m'é
R2	sannsáro	hatáke	sáru	
R3	tatíbana			

*1モーラ名詞の分類上のモーラ数は現代仮名遣いにおける仮名表記が基準だが、発音上は2モーラであり、アクセント体系上も2モーラ名詞に相当する。ただし、R2 が欠けている点が現代仮名遣い上の2モーラ名詞と異なる。

いわゆる名詞などの大部分の内容語は必ず nF から始まり、語彙的に与えられたアクセントに応じて特定の位置で F に切り替わります。教育ローマ字と同様、語彙的に与えられた nF 区間の始端で発話を区切って得られる領域を単位として AP と呼びます。

アクセントは、nR 区間を作るものについては combining macron (a を例として ā) , R 区間を作るものについては combining acute accent (同 á) を語彙的に定められた nF 区間の最終モーラの母音部分に付して示します。単に「アクセント」という場合、これらの記号とその位置が表す特性を指します。

曲線声調のうち、R は実現に最低で2モーラを要します。そのため、sáru などの第1モーラに R アクセントをもつ形式は、実現に際しては R 区間が第2モーラまで延長されます。ただし、その場合でも伝統的な発音ではもともと第2モーラまで R が指定されている huné 型との違いがあるとされています。単独発話において sáru 型と huné 型の

ピッチ形の違いが現れない体系を扱う場合でも利用できる、両者を分つ根拠は「「猿」と「船」」の節で述べます。

文中における AP 同士の境界部分はスペースを空けることで示します。これは統語的には一語であるような複数の AP についても同様です。たとえば、「グレープヨーグルト」は gurelpú yolgūruto と綴ります。

順接の付属語と低接の付属語

語彙項目には、名詞のように必ず nF から始まるものと、必ずしも nF から始まらず、AP の後部に位置するものがあります。後者について、関西方言には一般に「順接の付属語」とよばれるものと「低節の付属語」と呼ばれるものがあります。関西ローマ字の理論の中では、これらのグループはより厳密にはアクセントを持つものと持たないものとして再定義することができます。低節の付属語は単にアクセントを持たないため、以下のように、単に AP を延長することによってのみ韻律に寄与します。

表: 低節の付属語が名詞に後続した場合の例

	1	2	3	4
	amerikā	ayabēsi	kimītatı	kōsumosu
ya	amerikā ya	ayabēsi ya	kimītatı ya	kōsumosu ya
yatta	amerikā yatta	ayabēsi yatta	kimītatı yatta	kōsumosu yatta
nara	amerikā nara	ayabēbsı nara	kimītatı nara	kōsumosu nara
	ohanası	sannsáro	tatíbana	
to	ohanası to	sannsáro to	tatíbana to	
tte	ohanası tte	sannsáro tte	tatíbana tte	
yori	ohanası yori	sannsáro yori	tatíbana yori	

これにたいして、順接の付属語は少し異なる性質を持っています。順接の付属語が名詞などに後続すると、その名詞などの最後のモーラの曲線声調が、付属語の語彙的に

指定されたモーラまで延長されます。直前のモーラの曲線声調を付属語内のどこまで延長するかが順接の付属語のアクセントであると考え、順接の付属語のアクセントは nF から始まる形式とは異なる記号である combining grave accent (à) で示します。次の表は、いくつかの名詞に順接の付属語が後続した場合の例を示したものです。

表: 順接の付属語が名詞に後続した場合の例

	1	2	3	4
	amerikā	ayabēsı	kīmītatı	kōsumosu
yàrou	amerikā yàrou (ameikayārou)	ayabēsı yàrou (ayabēsıyarou)	kīmītatı yàrou (kīmītatıyarou)	kōsumosu yàrou (kōsumosuyarou)
desù	amerikā desù (ameikadesū)	ayabēsı desù (ayabēsıdesu)	kīmītatı desù (kīmītatıdesu)	kōsumosu desù (kōsumosudesu)
dèsıta	amerikā dèsıta (amerikadēsıta)	ayabēsı dèsıta (ayabēsıdesıta)	kīmītatı dèsıta (kīmītatıdesıta)	kōsumosu dèsıta (kōsumosudesıta)
	ohanası́	sannsóro	tatı́bana	
dè	ohanası́ dè (ohanası́dé)	sannsóro dè (sannsórode)	tatı́bana dè (tatı́banade)	
nì	ohanası́ nì (ohanası́nı́)	sannsóro nì (sannsóronı́)	tatı́bana nì (tatı́bananı́)	
hà	ohanası́ 'hà (ohanası́'há)	sannsóro 'hà (sannsóro'ha)	tatı́bana 'hà (tatı́bana'ha)	

かっこ内は AP 内の語彙項目について分析的に表記せず、あたかも AP が一つの語彙項目であるように、表層形の曲線声調に従ってアクセント記号を配置したものである。これに対して、かっこが付されていないものは、AP 境界に加えて曲用類（教育ローマ字における名詞、形容名詞、および時名詞に相当するもので、学校文法における体言に概ね相当するもの。）の語基と語尾の間にもスペースを挿入したものである。この文書の中では、後者の表記法をデフォルトの表記法として採用している。以下も同様とする。

「猿」と「船」

表「名詞のアクセント体系」における sáru と huné の対立は、AP 内でアクセントがある形式が後続した場合に現れます。次の表は、sáru と huné に gà が後続した場合に両名詞のアクセントの違いがどのように現れるかを示したものです。

表: sáru と huné に gà が後続した場合の実現形の比較

	sáru	huné
gà	sáru gà (sarúga)	huné gà (hunegá)

表から分かる通り、huné gà では gà のアクセントが通常通り huné の最終モーラの曲線声調をコピーし、全体としては hunegá という発音になっていますが、sáru gà では sarúga という一見奇妙な形になっています。これは、gà のアクセントが sáru の最終モーラの曲線声調をコピーし ga となった後、sá の曲線声調が R であることから、実現に2モーラを要し、右に1モーラ延長され sarúga となったものと考えられます。

伝統的な発音では sáru と huné では単独でもピッチ形に違いがあるものとされています。そのような体系を扱う場合は、単独での発音を根拠として sáru 型の形式を認定することができます。

分節音の表記

分節音は、教育ローマ字と同様、綴りからローマ字入力の方法がすぐにわかるようになっている必要があります。ただし、関西ローマ字は日本語母語話者を対象としているため、表記上の綴りとローマ字入力時の綴りが規則的に対応していれば、規則を知らない人が見て推測で入力方法を判断できるようになっている必要はありません。

分節音は主に以下の字母を用います。現代仮名遣いでは非常にさまざまな綴りが現れうるので、これら以外の文字が使われることもあります。いずれの場合でも、関西ローマ字における正しい綴りは、入力されるべき現代仮名遣いの文字列と、対応する音声言語としての関西方言の分析によって決まります。

表: 主な分節音の一覧

a i u e é o k g s z t d n h b p m y r w

関西ローマ字で使う主な分節音の一覧。転写元のテキストに応じて入力に必要な文字を使うため、これら以外の文字が使われることもある。

母音

母音字は a i u e o の5字を用います。i e はドットの有無を使い分けることに注意してください。ドットがない方がデフォルトです。ドットをつける規則は後述します。i はローマ字入力に際しては i のキーに対応します。母音にはアクセント記号が乗ることがあります。

関西方言の基本の5母音のうち、ウは i) o または u の直後で長音を形成する（オと発音される）場合、および、ii) 直前にスペースがある場合は u と綴り、それ以外の場合には wu と綴ります。イは、子音の直後とスペースの直後では原則としてドットの無い i ですが、e に後続し、かつ、長音後部として発音できない（エと発音することができない）場合、ドットをつけて i とします。さらに、その場合、i の位置にアクセント記号が付される場合は、ドットを直前の e に移動して éi または èi とします。

子音

子音字は主に k g s z t d n h p b m y r w を用います。他の文字でも入力できる場合は、文字数がかわらない場合はこれらの文字が優先されます。例えば、「ふ」が hu

でも fu でも入力可能な場合、文字数はどちらも2文字なので、上掲のリストに入っている h が f よりも優先され、hu が用いられます。

子音字のうち八行の子音にあたる h は、助詞の「は」および「へ」においてはワ行音で発音されますが、この場合、h の直前にアポストロフィを付し、'h とします。アポストロフィは、環境によっては自動的に引用符に置き換えられてしまうので注意が必要です。

拗音

拗音は以下の規則に従います。

1. 1モーラを3文字で入力することができる場合は、3文字で綴る

1. 2文字目に y を用いて入力することができる場合は、y を用いる

2. 2文字目に y が使えないものについては、w または h を用いる

2. 1モーラを3文字で入力することができない場合は、入力できる限りの最短の綴りで綴る

3. x または l が必要な場合は、x を用いる

例えば、「チャ」はローマ字入力においては tya と綴ることができ、これは3文字であり、かつ2文字目が y なので、この通りに綴ります。また、「ティ」は y を使って入力することができないため、h を使い、thi と綴ります。「ヴァ」は3文字の組み合わせでは入力することができないため、可能な va, vuxa などのうち最も短い va を綴りとして採用します。「イツヌ」などでは、促音の部分を xtu または itu とタイプする必要があり、これは x または l が必要な場合に当てはまるため、x を優先し、ixtunu と綴ります。（「イツヌ」の関西方言におけるアクセントは筆者には判断できないため、省略しています。以下も同様です。）

促音と撥音

促音は原則として後続する子音字を重ねることで綴ります。ただし、後続音が n の場合やウ以外の母音の場合、子音字を重ねて促音を入力することができないため、xtu と綴ります。例えば、ポケモンの「ウッウ」は uwwu、インターネットスラングの「イッヌ」は ixtunu と綴ります。

撥音は常に nn と綴ります。ローマ字入力の際に「ん」を原則 n 一つで入力している方は注意してください。

長音の後部

関西ローマ字で扱う長音には以下の三種類があります。

1. 現代仮名遣いにおいて、長母音全体が漢字一字で書かれるものおよび後部が仮名の母音字（アイウエオ、あいうえお）で書かれるもの
2. 後部が現代仮名遣いで表記されないもの
3. 後部が現代仮名遣いで長音記号（ー）で書かれるもの

このうち、1 は単なる母音連続として扱います。ただし、エ段長音についてはローマ字入力時の綴りが ei の場合は ei とします。また、長音後部が u でタイプされうる場合は、関西ローマ字でもそのまま u と綴ります。隣り合う漢字二字を跨いでいたり、その他の何らかの理由で長音を形成していないと考えられる場合は、ウに当たる部分は wu と綴られることに注意してください。

2 はいわゆる1モーラ名詞の場合が当てはまります。関西方言の名詞は、現代仮名遣いではひらがな1文字相当で書かれるものであっても、発音されるときには2モーラ相当の発音になります。その場合に発音に合わせて余計な字をタイプするわけにはいかないので、長母音部分のうち、アクセント記号が乗らない方をアポストロフィで表しま

す。アポストロフィはワ行音で発音される h に付す記号でもあります。母音に使う場合は1モーラ名詞に限られ、1モーラ名詞につく付属語で h がハ行で発音されるものはないので、曖昧性は生じないようにしています。

3 の場合、長音記号に当たる部分を l (ラテン文字のエル) で綴ります。ただし、その部分にアクセント記号があるときは、l を一つ左に移動します。例えば、「ブルーベリーヨーグルト」は、burulberlí yolgūruto と綴ります。

注意が必要な綴り

「を」は wo と綴ります。

表記のバリエーション

関西ローマ字 2.0 以降は、1.0 で採用されていた段階的な表記レベルが廃止され、複数の点について柔軟に目的によって異なる表記規則を採用することができるようになっていきます。ただし、読者にわかりやすいよう、合目的で一貫した規則を採用するようにしてください。この節では、どのようなバリエーションを選ぶことができるのかを説明します。

IP 区切りを示したい場合は、教育ローマ字に準拠した方法で各 IP の冒頭を大文字にすることで示します。ただし、関西方言の IP の実態は不明な点が多いため、現在ではデフォルトの表記法として IP 表示を行うことを推奨していません。IP 表示を行わない場合は、文頭も含めて全ての文字を小文字で表記します。IP を表示する以外の目的で大文字を使うことはできません。

約物は原則として自由ですが、ラテン文字で書かれる言語に使う約物として、日本語話者にとって常識的でわかりやすい記号を選択してください。例えば、句点に対応する記号としてはピリオド、読点に対応する記号としてはカンマを使うのが通常です。それ以外の約物についても、できるだけわかりやすい記号を選択してください。なお、関

西ローマ字の規則で使用方法を定めている記号を別の意味の約物として使用することはできません。

言語学などにおいて表音的表記をする必要がある場合は、長音の規則を緩く解釈し、例えば通常は長音記号を使って表記される長母音についても、単に母音を重ねるだけにとどめることができます。ワ行音に子音が必要な場合は一貫して w を使うことができ、また、「を」を o と綴ることもできます。言語学で表音的表記をする際に慣習的に使われるスラッシュやブラケットで文字列を括る記法も採用することができます。必要があれば、ハイフン等をスペースで区切られる単位の途中に挿入することができます。その場合、ハイフン等の記号の使い方は一貫した規則に従うようにしてください。活用類の内部を分析する場合も同様に、その場の目的に応じて合理的な表記を行うようにしてください。関西ローマ字 1.0 で採用されていた「活用表記」も参考にすることができます。

AP の内部をスペースで分割するか否かは任意です。分割しない場合、アクセント記号として à は不要になります。分割する場合は教育ローマ字に準拠した分析方法を推奨しますが、全体として発音に対する整合性が得られれば他の分析方法を採用することもできます。

参考文献

本稿で採用している関西方言についての通説的な理解、および名詞の語彙データは『日本語アクセント入門』（三省堂）、その他の語彙データは『京言葉』（<https://akenotsuki.com/kyookotoba/>）によります。